

英語科編3

第103号

平成21年10月10日

1 英語教育の始まり

松田 定久 不明 明治21~明治28

「在職図表」の最初の英語教官として名前が挙げられているのは、松田定久です。しかし、松田については、東大で植物学を学んだらしいこと、なぜ、植物学を学んだ松田が英語の教官になったのか、また、どのような人物であったかについては、全く不明です。前号まであげた伊村論文を見ても、「英語授業がだれによって行なわれたかについては、最初の5年ほどについては、残念ながらわかっていない。附属中学校の英語教師として名前の残っている最初の人物は、…矢田部良吉である。」とされています。しかし、次に述べるように、このころ非常勤として英語講師であった本田増次郎や遣澤恒猪について、若干のことがわかっていきます。

番外 最後の嘉納治五郎の弟子

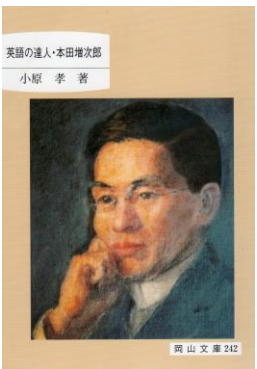
本田増次郎 岡山県出身明治22~24

東京高師教授

嘉納治五郎が、柔道を広めんとして講道館を設立したことはよく知られていますが、彼はそのほかに、「弘文館」という文学の家塾も興しています。それは、東大を最初に卒業した明治15年のことで、そこでは、嘉納が修得した学問を少しでも世の中に広めたいという志でつくったものでした。その家塾は、彼が明治22年に欧州に留学するまで続きましたが、そこでは、英学なども教えられ、その後、弘文館は最初の場所からの転居などもあり、最後まで残ったのは、宗像逸郎（番道家・後に附属中教官）仙台一高の校長を勤める・東大教授、教育学者宗像誠也・35回の父と本田増次郎でした。二人とも、講道館では柔道を修行し、そして、7年の過程でそこを卒業した本田は、嘉納が帰国後、熊本第五高等学校長となると、その英語教師となり、その後、現在の桃山学院大学の教師を経て、明治29年に附属中学校の英語の非常勤として採用され、後に東京高等師範の教授となりました。本田の英語の授業がどのようなものであったかに

ついてはよく分かりません。

ところで、同じころ、夏目漱石も高師の英語の教師を嘉納から依頼され、嘉納の言葉に説得され、2年ほど非常勤を勤めました（夏目漱石「処女作追懐談」）。したがって、後に附属中の教官になるもののうち、柵橋源太郎（理科教官）ほか数人が夏目漱石の英語の授業を受けています。なお、本田は、著名な文学者山本有三の岳父です。小原孝著『英語の達人・本田増次郎』岡山文庫平成18



2 土浦第一高等学校校長として

遣澤 恒猪 高知県出身 東高師明治2

4卒 在職24~26

遣澤恒猪は、明治24年東高師の文学科を卒業するとすぐに附属中の教官になりました。遣澤の授業については不明ですが、その後、茨城県の龍ヶ崎中学校長として転任し、さらに、明治37年から3年間、土浦第一高等学校の校長を勤めています。そして、昭和2年の名簿では、永井道明が創設した本郷中学の教員になっていきます。

3 『新体詩抄』から東高師校長へ

矢田部良吉 神奈川県出身 在職27~

34 東大植物学初代教授 東高師校長

矢田部良吉は、父が幕末の蘭学者で、江川太郎左衛門に薫陶を受けた学者ですが、彼が幼いころに亡くなり、母とともに横浜で暮らし、横浜税関の学校で宣教師のバラやヘボン（ヘボン式ローマ字の創唱者）などに英語を学びました。18歳のときに中浜万次郎（ジョン万次郎）らとともに、開成学校（後の東大）の教授となりましたが、その後、森有礼（初代文部大臣）とともに、アメリカに留学し、そのとき一緒に留学したのが日本の近代詩の出発点とな

った『新体詩抄』を編纂した外山正一でした。

アメリカのコーネル大学で植物学を専攻した矢田部は、帰国するとともに植物学の初代教授となりました。しかし、彼の活動は植物学だけでなく、ローマ字会・演劇改良・社会改良運動など、幅広いものがありました。ところが、その幅広い活動が問題となり、明治24年、40歳のとき、「非職ヲ命ズ」として東京大学の教授を辞めさせられてしまいました。伊村元道はこのできごとを、「要するに有能で積極的な活動家の教授が、兼職や学外での活動に精力をさきすすぎ、同僚たちに妬まれた、というところである。」（『ある英文教室の100年』）と述べています。

それから、3年たった明治27年、嘉納の要請で、矢田部は附属中学の英語嘱託教員・翌年からは正規の教官として教壇にたつこととなりました。彼の授業がどのようなものであったかについては、神保格（10回・後に附属中教官）の思い出話があります。「先生（矢田部のこと・山口）は植物学の大家であるが、英語も達人で、ふだんはニコニコしておられるよいお爺さんである。お爺さんといっても勘定してみれば、私共の教わった時は先生44、5歳くらいであったはずで、ほかの先生が、もっと若かったせいも、私共にはかなり老人に見えた。ふだんはよい先生であるが、怒るととてもおっかない先生であった。」また、矢田部夫人の回想では、「酒は家では一滴も飲みませんでした。煙草が好きで、兼巻の大箱もたくさんありましたが、高師の附属中学で英語を教えるようになって、生徒が煙草を喫んではいけないというので禁煙してしまい、死ぬまで飲みませんでした。」とあります。矢田部の中学生に対する心構えがわかるエピソードです。

その後、矢田部は高等師範の教授や嘉納の後を継いで10代目の校長となったり、高師附属の音楽学校（現在の善大附属音楽高校 主事（校長）なども兼任で勤めたりしました。しかし、在任1年目の夏、鎌倉で遊泳中に溺死、49歳で亡くなりました。

矢田部良吉著『羅馬字草学び』羅馬字会 明18

（山口・未見）